

保健・医療・福祉の連携・統合 住民参加

尾道市北部

公立みつぎ総合病院を核とした住民参加の地域包括ケアシステム

みどころ！

◇昭和 49 年から地域包括ケアシステム構築に取り組む、地域包括ケア発祥の地。公立みつぎ総合病院を核とした在宅ケアによる「寝たきりゼロ作戦」、保健・医療・福祉の連携・統合各種介護施設の併設による維持期リハビリテーション、住民組織とボランティアによる住民参加等を掲げ、長い実践の歴史がある。

地域概要

尾道市北部エリア（旧御調町を中心としたエリア）

総人口 19,789 人

65 歳以上人口高齢化率 30.4%

75 歳以上人口高齢化率 17.2%

（平成 22 年国勢調査）

広島市と岡山市の中間地点に位置する尾道市。旧御調町は尾道市の中心部から北へ車で約 30 分、山あい田園風景の広がる農村地帯にある。尾道市の半分を占める面積は三方を山に囲まれたなかで民家は点在し、交通の便は悪く、産業の衰退等急激な高齢化がすすむ。

実施主体

公立みつぎ総合病院

尾道市御調保健福祉センター

尾道市

地域包括支援センターの活動紹介

【体制】

市直営により実施（事実上、公立みつぎ総合病院の直営）。管理者（主任ケアマネ・保健師）、保健師 3 人（内 2 人は兼務）、看護師 2 人、社会福祉士 1 人、精神保健福祉士 1 人からなる。

【活動】

在宅介護支援センター（基幹型）を前身に、地域包括支援センターを平成 18 年度に御調保健福祉センター内に設置。同一建物の中に行政部門である尾道市御調保健福祉センターの他、訪問看護ステーション、訪問介護事業所、居宅介護支援事業所、介護予防センター、市社会福祉協議会の御調支所があり多職種連携による支援を行っている。

取組の背景と課題認識

公立みつぎ総合病院では、昭和 49 年に訪問看護を開始して以来、「つくられた寝たきり」を予防し、障がい高齢者の在宅生活を支援するために、病院と旧御調町行政が一体となり、保健・医療・介護・福祉サービスの提供に必要な拠点を整備し、地域包括ケアを実践してきた。医療の提供だけでなく、予防及び生活のことも包括して支援することで、在宅でその人らしい質の高い生活が送れるという、すなわち住み慣れた家で、地域の人々と一緒に生き生きとした健康な生活が送れることを実践すべく日本で初めての取り組みを推進してきた。保健・医療・介護・福祉サービスが総合的、一体的に提供されている町の福祉充実度に期待して全国から多くの住民が移り住み、住民の意識の高さがうかがえる。やがて来る 2025 年問題である特に若者の人口の減少や超高齢化に、住民とともにつくる福祉のまちづくりを再考したいとの声があがり、地域包括支援センターを中心に地域主体のまちづくりに着手することとなった。

取組の内容

～住民主体の福祉のまちの再構築をめざして～

目的 住民一人ひとりが自助互助の重要性を理解し参画する
2025年にむけ、あるべき地域の姿についてともに考え、活動する機会を創出する
幅広い地域活動人材を確保、育成する
生活支援コーディネーター等リーダー養成へ移行することをふまえて実施する

- 【1】「地域づくり講演会」の開催 ～自助互助の大切さを広く地域住民に啓発する
テーマ「人生90年時代 ひとりを生きること、人と共に生きること」
～最期まで住み慣れた地域で生き続けるための条件～
講師：春日 キスヨさん（臨床社会学者）
- 【2】先進地視察 ～具体的事例を通じて地域活動のイメージを得るために
香川県綾歌郡綾川町国保陶病院（健康福祉課・地域包括支援センター・社協等）
・介護予防サポーター養成及び自主グループ立ち上げまでの支援、
・認知症医療ケア連携、ケアパスの活用状況等について
・高齢者声かけ・見守りまちかどほっと歓事業について等
- 【3】ワークショップ「地域の未来を語ろう工房」の開催
講師 丸山 法子さん（一般社団法人リエゾン地域福祉研究所代表理事）
～住民が自ら企画し、検討し、準備、行動できる住民主導型の組織づくりを目指す
地域をよく知り、実際に地域で活動している人も含め、広く参加メンバーを募集。ワー
クショップでは、具体的な地域ニーズの把握、活動者の見つけ方や相互交流などを図る。
- 【4】「地域の未来を語ろう工房」反省会及び今後の計画について話し合い
町内のNPOの代表者と「みつぎさいこう」代表者を交えて、今後の取り組みを協議。
会を「ぺちやくちゃ倶楽部」とし、参加メンバー等検討。チラシ製作を依頼する。
- 【5】第1回 ペちやくちゃ倶楽部開催 ～地域住民同士の対話の場を創出する
「地域の未来を語ろう工房」で出たキーワードの「居場所づくり・空き家再生・男性の
集い・住み開き」をもとにグループワーク。平成27年4月継続開催予定。



<地域づくり講演会の様子>



<ワークショップの様子>

取組の経緯

昭和 49 年	訪問看護（医療の出前）開始
昭和 50 年代～	行政部門である保健福祉センター（旧健康管理センター）を病院に併設、積極的に寝たきりゼロ作戦を展開 <ul style="list-style-type: none"> ・病院の保健師・看護師や理学療法士やホームヘルパー等様々な専門職がチームを組み在宅サービスの提供を開始（保健・医療・福祉の連携・統合に向けて） ・病院医師を始め多職種参加による夜間健康づくり座談会の開始。現在に至る ・食生活研究グループが誕生。現在に至る
昭和 60 年～	ボランティア創設期 <ul style="list-style-type: none"> ・住民ボランティアとして時間貯蓄性の福祉バンクの誕生（平成 17 年合併で消滅）、在宅看護職者の会が誕生、現在に至る
平成の初期～	病院・施設ボランティア始まる。医療・福祉ボランティアとして 32 団体が加入、現在 500 人弱が活動。住民参加の原動力になり、地域包括ケアシステムの一翼を担っている
平成 12 年～	介護保険制度スタート
平成 18 年～	地域包括支援センター設置、介護予防の拠点として活動開始
平成 21 年～	介護予防実態分析支援事業（3 年間）を実施。65 歳以上の高齢者を対象に悉皆（基本チェックリスト）調査を実施。併せて地域の課題を分析。
平成 24 年～	「認知症になってもこの地域で安心して住み続けるためには」をテーマに、住民参画の基に地域診断を実施
平成 24 年～	尾道市シルバーリハビリ体操事業開始し、介護予防講演会を各地区で実施
平成 25 年～	シルバーリハビリ体操指導士を養成開始。27 年 3 月現在町内に 15 人の指導士が誕生 地域包括ケア会議の定期開催を開始

取組の成果・今後の課題と展望

◆成果◆

①住民の主体性を再認識できた

福祉充実度ナンバーワンの御調町には近隣にはない十分な保健医療福祉のサービスがあり、住民は生涯安心して暮らせることを享受する。しかし今回、これからは受け身ではなく住民自らが担い手となり、相互に安心できる生活を支え合うことが必要であるということが分ってきた。意識の転換を求められた住民からの問いや意見に対していねいに答えるなかで、十分に理解を得たと手ごたえを感じ、今後の具体的な住民参加の流れを創出し、提示していきたい。

②新たな人材確保の道すじができた

高齢化と人口減少をうけて、地域活動の担い手として若年層へのアプローチに初めて取り組んだ。地域活性化の活動者数人の参画があり、親の介護や子育てなどを含めた幅広いテーマで新たな人材確保の見通しがついた。今後、生活支援コーディネーター養成を見据えた人材育成に努めたい。

以上、尾道市北部エリア（旧御調町を中心としたエリア）で地域包括ケアシステムが構築された結果、そのアウトカムの成果として、①寝たきりの減少、②高齢者医療費のダウン、③首長の理解（昭和 59 年の行政部門の機構改革）、④住民参加による「線」から「面」の連携による地域づくり等がみられるようになってきた。

◆課題と展望◆

迫りくる 2025 年問題を考えた時、更なる地域包括ケアシステムの構築を推進していくうえで、多職種連携はもちろん、今まで以上にボランティアをはじめ、民間企業や商店なども巻き込んだ住民参加の地域づくりや、認知症等の増加に対応し住民の理解はもとより、これらの活動への参加等人材確保を現状以上に検討する必要がある。

取組のポイント、機能強化ポイント

住民と病院スタッフ（医師、看護師、保健師、PT・OT・ST、介護福祉士など）の細やかな人間関係づくりが特長的。小さな町だからこそできる人とのふれあいが、ケアの根底に流れていることを実感する。地域包括ケアの長い歴史の中で、家族三代にわたって公立みつぎ総合病院がかかりつてとなっているのは珍しくない。地域包括ケアは、こうした家族と病院の長きにわたる在宅ケアのかかわりがあり、さらに地域包括支援センターが地域課題解決のコーディネート力を発揮してこそ実現するものだとあらためて学ばせてもらえる。

連絡先

尾道市北部地域包括支援センター	0848-76-2495	担当：山内 香織
広島県地域包括ケア推進センター	082-254-1166	
広島県健康福祉局地域包括ケア・高齢者支援課	082-513-3198	